

【設置手順】

- ① 本機の設置位置を決め、本機設置用スタンドと本機を設置します。

本機は、電源の切り替えやバッテリーの交換などの便が良い入り口付近に設置するのが一般的です。ただし、柵の外側に設置すると収納箱などを足掛かりに柵の中に飛び込まれたりするので、本機は必ず柵の内側に設置するようにしましょう。



本機を柵の外側に設置すると、加害動物の侵入路になってしまう恐れがあります。

本機は、必ず柵の内側に設置するようにしましょう。

- ② 3～5m 間隔で支柱を打ち込みます。

支柱には、あらかじめ必要数の碍子クリップを付けておくとう便利です。支柱は、ハンマーなどで安定するまでしっかりと地中に打ち込みます。この際、塩ビパイプキャップ等を当てて打ち込むことで、支柱の破損を防げます。

- ③ 碍子クリップで柵線の高さを調節します。

下の目安を参考に、対象動物の目線に合う位置に柵線が来るように碍子クリップの位置を調節します。ただし、柵線の間隔はあくまでも目安ですので、侵入状況に応じて修正する必要があります。

なお、確実に通電させるため、碍子は動物の侵入方向に向けておきます。

電気柵の設置高と段数の目安

対象獣種	段数の目安	最下段の高さ (目安)	備考
シカ	5 段	30 cm	
イノシシ	2～3 段	20 cm	
サル・アライグマ・ ハクビシン	3 段以上	10～15cm	複合柵の設置を推奨
その他の中型獣類	3 段	10～15cm	最下段の草刈りが大変な場合は、内側に竹や波板を設置し、潜り込みを防ぐ方法も有効。

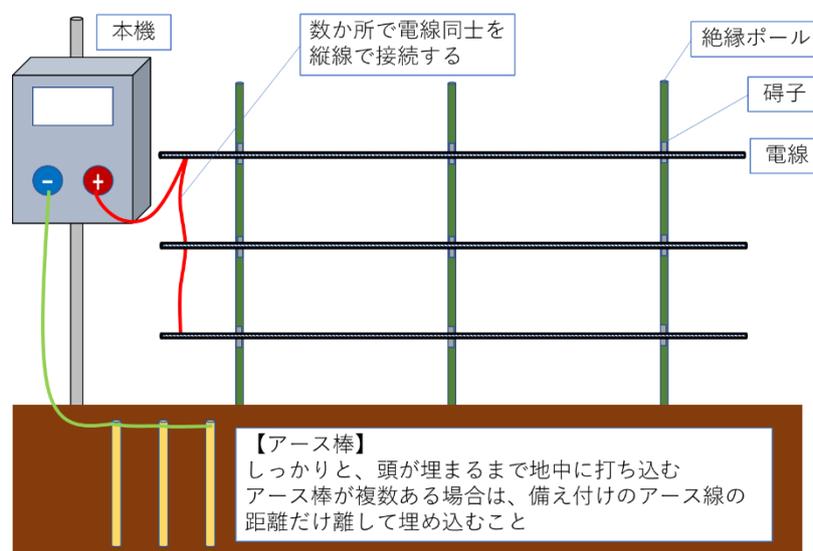
④ 柵線を設置します。

碍子クリップに柵線を通して電気柵を設置します。人が近寄る可能性のある場所に危険表示板を設置していきます。

段ごとに適当な間隔で緊張具を付け、柵線がたるみ過ぎないように軽くテンションを掛けていきます。柵線のテンションに負けて支柱が倒れないように、四隅の支柱には木杭など強度の高い支柱を用いることも有効です（この場合、碍子はねじ込み式のものを使います）。

電気の流れる距離を最小にする（流れる電圧を最大化する）ため、数か所で電線同士を縦につなぎます。

入り口を決め、ゲートハンドルを設置します。ゲートハンドルは、輪にした柵線に掛けるなどして、隙間なく電気が流れるように工夫します。



⑤ アース棒を打ち込みます。

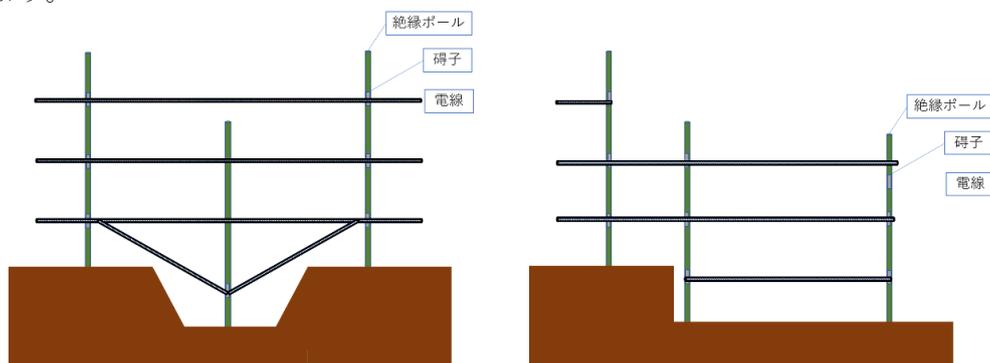
アース棒は、本機の出力量に応じて必要本数や長さが異なります。装置のマニュアルに従い、適切なアース棒を使用しましょう。

アース棒は、頭まできちんと埋設することではじめて十分な効果を発揮します。複数本ある場合も束ねて埋めることはせず、備え付けのアース線の距離だけ離して埋設するようにしましょう。

⑥ 外周を回り、隙間が無いか確認、修正します。

畑の排水溝や段差などは、動物のかっこうの侵入路になります。埋められる隙間は、石や土などで埋めて、できるだけ隙間が開かないように修正しましょう。

排水溝など、埋めることのできない場所は、溝の中に支柱を立てて柵線を追加しましょう。



溝や段差の修正方法の例

⑦ 24時間稼動するように設定し、電圧をテスターで測ります。

動物が足を置く地面と電線にテスターを当てて、動物が柵線に触れた場合、どの程度の電気が流れるか測定します（すべての段に同程度の電圧が流れていることを確認してください）。

降雨時には 1,000 ボルト以上、電圧が低下することがあるので、電圧は 5,000 ボルト以上になるように設定しておきます。

電圧が低い場合は、漏電箇所がないか外周を今一度確認します。明らかな漏電箇所が無いのに電圧が上がらない場合は、本機の出力が低下している場合がありますので、本機から電線を外して、テスターで本機の出力電圧を直接測定してください（電線をつないだままだと正しい出力を計測できません）。

バッテリー残量が十分であるにも関わらず出力が上がらない場合は、本機が故障している可能性があるため、販売店に問い合わせてください。

本機の出力に問題が無く、明らかな漏電も箇所が無いのに電圧が上がらない場合は、柵線の総延長距離が機械の性能を越えている可能性があるため、販売店に問い合わせるか、マニュアルを確認してください。

【その他の注意点】

- ① 本機は、同一柵線上に 1 台のみ接続してください。複数の機械を接続すると機械が故障する恐れがあります。
- ② 電気柵は、必ず市販の装置を使いましょう。家庭用電源を直接つなぐのは犯罪です。
- ③ 電気柵は心理柵です。動物を慣れさせないように、設置時には常に電源を入れておきましょう。電源を入れない時期は、撤去しておくことも重要です。